

要 約

- 全長20.5~25.0mmの種苗を生産し、118,500尾を中間育成に供した。
- 人工プランクトン等配合餌料を初期餌料として使用したところ、大多数の消化管内に配合餌料が確認された。しかし消化管内容物を検鏡した結果、仔魚の消化能力の問題が示唆され、さらに検討する必要がある。
- 今年度、新たに浮上横転、ヘイ死の問題が起り早急に対策を講じる必要がある。
- 中間育成終了時の生残率は、屋我地島中間育成成分が69.6~74.7%、辺土名中間育成成分が33.8~47.7%で、平均56.6%であった。
- 夏季の高水温時の事故によるヘイ死を除けば生残率は70%程度は見込める。これは輸送方法の改良によるところが大きいと考えられる。
- 1989年は平均尾叉長100mmのハマフェキ人工種苗を屋我地島前垣地先の運天水路内と国頭村辺土名漁港内でそれぞれ4.7万尾、1.8万尾放流した。放流魚はすべて左腹鰭を抜去して標識した。また、辺土名漁港内放流群については放流後の音響馴致による管理を試みた。
- 放流魚の異形魚率は、屋我地島放流群で平均20.54%、辺土名漁港内放流群で平均3.60%であった。また、抜去腹鰭の再生率(抜去失敗率)は屋我地島放流群が処理後2週間後で16.16%、辺土名放流群が約8週間後で38.72%であった。
- 1986年放流群は1989年1年間に尾叉長314mmのものが1尾再捕されただけであった。また、これ以前の放流群の再捕に関する情報は得られなかった。
- 1987年放流群は、名護漁協の市場調査で69尾、国頭漁協では9尾発見された。また、再捕報告が7尾あった。同年級の天然群に対するこの放流群の混獲率は、名護で年間4.84%、国頭で0.44%であった。
- 1988年放流群は、名護漁協の市場調査で7尾、国頭漁協では12尾発見された。また、再捕報告は6尾であった。ただ、辺土名放流群については漁港内での遊漁による釣獲がかなりの数にのぼるとの情報があるが、具体的な数字は把握できなかった。同年級の天然群に対するこの放流群の混獲率は、名護で0.54%、国頭で1.33%であったが、推定水揚げ尾数にはほとんど差がなかった。
- 1987年放流群の累積回収率は1%を越えた。
- 再捕範囲は従来と同様に放流点から数km以内が体勢を占めた。しかし、今回初めて放流点とは本部半島を隔てて反対側の瀬底島周辺や名護湾で計4尾が再捕された。
- 同一放流群で同時期に再捕されたものでも尾叉長には最大100mm以上と個体間に大きな成長差がみられた。
- 1988年辺土名放流群は放流後漁港内に分布するものがみられたが、春から夏にかけて除々に分布を外寄りに移し、8月には漁港外に逸散したようである。
- 1989年辺土名放流群は、放流場所が漁港内であったこと、放流数が前年の倍であったこと、さらに音響馴致による管理を試みたことのためか、潜水観察による漁港内での観察数は前年群に比べて圧倒的に多かった。
- 音響給餌機への放流魚の蜻集数は目視観察では約200~500尾程度が確認された。放流魚のほかに